

研究の現場から

人面魚あれば人面草あり

数年前、山形県のあるお寺にいる鯉の頭部が人間の顔に見えることから人面魚とされ話題になり、これをきっかけに全国からここでもあそこでもいと柳の下の泥鰌ならぬヒトの顔をした鯉の情報がよせられたことがあった。野次馬根性で池の水面を覗き込みながら、それらしき鯉を探していると何となく厳かな顔にみえてきたものだ。

最近ではベットの顔をみて不細工な顔だからといってブサ男と名付け、面白がっているが、これも人面としてとらえたものであろう。猫の駅長さんには辞令交付があり制帽をかぶせられ居眠りしながらも、写メ対象になるなど勤務に励んでおられる。

昆虫ではカメムシで背面に黒い丸がついて、ちょうど目玉に見えるオオアカカメムシ、スズメガの仲間のクロメンガタスズメやオオボクトウが人面昆虫といえる。

いずれにしても人間様の勝手な視覚と感覚で遊んでいるだけのことであり、呼ばれている本人—この場合、人に近いから、本人でもよい—にとっては関係ないことである。

さて、我々のフィールドである植物、雑草でもじっとみていると何となく人の顔に似てくるものがある。

日本水仙を一鉢だけベランダで育てた。やがて伸びてきた茎の先の花を観察していたらどうも人の顔に見えてくる。目元、口元が微笑んでいるのである。

ツユクサの一種、トラデスカンティアの花はまるで下唇を突き出して出しゃばりのような格好に見える。いや見えると感じただけかも知れない。

さらに極めつけはパンジーで、まるで昔の漫画に出てくる学者、おじさん顔で考え込んでい

るように見える。なるほどパンジーの語源が考える人、パンセということからも頷けるものである。

オドリコソウの花の姿は、和名のとおり、なんとなくそっとたたずむ女性のように見えないでもない。

煩わしくなった人間社会から距離を置いて孤独を味わっていたつもりが、植物にも昆虫にもなることはできず人恋しくなってきた。



ツユクサ



ヒメオドリコソウ



パンジー

(文とカット 井上信彦)